

小人数規模日本人学校における学び合う力を育成するための 全校合同授業・評価の在り方

前ジッダ日本人学校 教諭

北海道札幌市立大谷地小学校 教諭 平 沼 啓

キーワード：全校道德、全校音楽、小人数規模日本人学校、学び合う力の育成、評価

1. はじめに

ジッダ日本人学校は小学校低学年から中学生までが在籍し、ここ3年間の全校児童生徒数の平均は約12名程度の少人数規模の日本人学校である。

本校の学校経営の重点の一つに「学び合う力の育成」がある。校内研修では「アクティブラーニングを通して学びの深まりが見られる授業」を主題に掲げ「アクティブラーニングを促すための手立てや教師の支援」を研究の視点として、子どもが主体的に学び合うためにどのように授業を構築すれば良いか、各教員が授業公開を行って研修を重ねてきた。

私は、全学年の音楽の専科指導と校内の道德推進教諭という立場で、3年間音楽と道德の実践を行ってきた。その中でも全校で行う音楽と道德における学び合う力を育成するための目標や手立ての在り方等について考察したい。

2. 学び合う力を育成するための全校音楽指導

(1) 複式指導と全校音楽

本校は少人数規模の日本人学校ということで、日常の音楽の指導は1・2年生、3・4年生、5・6年生、中学生という単位での複式指導が基本である。

日本人会行事への出演やインターナショナル校との交流、学習発表会等では、和太鼓と三線を使った音楽を小学校1年生から中学生までの全校児童生徒で演奏する。この出演に向けての練習は、全校児童生徒が揃っての、全校音楽の時間を使って指導をする。

小学校1年生から中学生までの全校音楽の時間において、すべての子どもたちの学び合う力を育成するための指導の在り方について考察するため、平成28年度と平成29年度に公開授業を行った。以下に平成28年度に実践した「いろいろな音のひびきを味わおう」という授業を紹介したい。

(2) 題材と目標設定について

全校音楽として小学校低学年から中学生までが一緒に学ぶためには、曲や題材がどの子にとっても親しみがあり、平易であるということが重要な要素となる。

この題材では、6年生の教科書に載っている「ラバースコンチェルト」という曲を用いて、パートに分かれて合奏するという活動を設定した。

この教材は、演奏が平易であり、本校の児童生徒にとって親しみのある曲だったので、児童生徒はどの学年の子も楽しんで活動することができた。

次に題材の目標の設定の仕方である。同じ教材を用いても、発達段階に応じた目標を設定する必要がある。音楽表現の創意工夫という項目で、中学校と小学校高学年は「パートの役割を生かした演奏の表現の工夫」、小学校中学年は「曲想を生かした表現の工夫」、小学校低学年は「楽曲の気分を感じ取る」ことを目標とした。

このように発達段階に応じた目標を設定することで、指導や評価を適切に行うことができた。

(3) 児童の活動とグルーピング

複数学年を指導する全校音楽では、意図的なグルーピングが学び合いを進めるために大切なキーポイントとなる。

例えば、前述したラバースコンチェルトの演奏グループは、教師が意図的にグルーピングした。男女の比率を同じくらいすること、上学年と下学年がバランスよく入ること、演奏に苦手意識を持っている子に配慮することを意図した。

このようにグルーピングを意図的に行うことで、グループでリーダーやパートを決める場面では、自然に上学年の児童生徒が司会役となり誰がどのパートを担当するのが適切かを主体的に話し合ったり、技術的な支援が必要な友達を適切なパートに割り当てたり教え合ったりするなどの学び合いの姿が見られた。

(4) 教師の支援、評価、見取りの手立て

全校音楽という位置づけで、主となる指導者T1と副となる指導者T2の役割をはっきりさせ、指導案に位置付けた。T1指導者は、中心となる発問と指示、板書など全体のファシリテーターとしての役割が中心である。T2指導者はグループ活動における見取りと支援を中心に行った。

このように教師の役割をはっきりさせることで、児童の発言内容や活動の様子が見取り易くなり、複数の教師でタイムリーな支援や声掛けが可能となった。

また、ワークシートを用いて思考や判断の過程を記録させることで、「パートの役割を生かした演奏の表現の工夫」「曲想を生かした表現の工夫」「楽曲の気分を感じ取る」という発達段階に応じた目標も客観的に評価することが可能となった。

全校合同音楽

やくより かんぶ
パートの役割を考えて
ラバースコンチェルトを合奏しよう

名前 ()

自分のパート ()

1. どんなことについて質問したいですか?

2. 他のグループの発表を聞いてよかったところやアドバイスを書こう

3. 今日の学習の振り返りをしよう

児童の思考を見取るワークシート

(5) 場の設定の工夫

全体での活動や演奏は集会室、パートやグループごとに分かれて練習するときには、隣接する図書室や教材室などを利用するようにし、互いの練習の音が干渉しない場の工夫をした。

また、楽器の適切な配置や譜面台の用意、話し合いを進めるための移動黒板など機材の事前準備も入念に行った。児童が集中して主体的に活動を推進するためには細かな場の設定の配慮も必要となることがわかった。

3. 学び合う力を育成するための道徳指導

(1) 複式指導と全校道徳

本校での道徳は、1・2年生、3・4年生、5・6年生、中学生という単位で、学級担任が指導するのが基本となっている。

私は、道徳推進教師として、小学校1年生から中学生まですべての子どもたちの学び合う力を育成するための道徳の指導の在り方について考察するため、平成28年度から平成30年度にかけて校内研究授業及び参観日での保護者参加型全校道徳の授業を行った。以下にこれらの実践から得られた成果について紹介したい。

(2) 資料選定と資料提示の方法

様々な学年が集まる全校道徳授業では、用いる資料の内容理解をいかに容易にさせるかが主題に迫るポイントとなる。よって、資料の内容が平易で低学年でも理解しやすいストーリーをできるだけ選択することを心がけた。しかし、理解のし易さだけを求めるとストーリーが平板になり学びの深まりが生まれない。

そこで、葛藤が生まれたり、複数の登場人物の立場から考えられたりするような資料を用いた。

こうすることによって、児童生徒は内容を十分に理解した上で課題を主体的に考えていくことができた。

さらに、資料の提示方法は紙に印刷したお話を配るのではなく、パワーポイントで挿絵を写しながら、教師の読み聞かせによって行った。文字による理解が難しい低学年の児童にも資料の内容理解が平易となった。また、臨場感を与える効果音を入れたりすることで児童生徒は集中して資料の世界に浸り、そこから主体的に課題を考える手助けとなった。



パワーポイントにて資料提示

(3) 座席の配置と発表や話し合いの方法

座席の配置は、毎回意図的に設定した。学び合いが促進するように、上学年の子と下学年の子、男子と女子がなるべく隣同士になるように配置した。こうすることで話し合いの場面やワークシートを書く場面、役割演技などで互いに主体的に学び合う姿が見られた。

また、教師の発問に対する発言や話し合いの方法も1時間で様々な形態を取り入れるようにした。発言の方法としては(1)教師の意図的な指名(2)一般的な挙手、指名、発言(3)児童相互が次に発言する子を指名する「リレー指名」などを取り入れた。また、話し合いは(1)隣同士のペア(2)座席の近くの3～4人グループ(3)3～4人のグループに教師や保護者が入る、などの方法をとった。

発言のさせ方や話し合いの仕方を工夫することで、児童同士、児童と教師、児童と保護者などの学び合いが促された。

(4) 板書

板書は資料と主題の関係を捉え「構造的な板書」になるように心がけた。児童生徒の発言を位置付け、ネームカードを用いる、色分けをする、登場人物の挿絵を貼るなど、一目見て1時間の内容がわかるものにした。

こうすることで、児童の発言が活発になり、学び合いに深まりが生まれた。

(5) グループエンカウンターの導入～内容と形態～

資料の中で考えたことを、エクササイズを通して実感したり学び直したりするグループエンカウンターを意図的に設定するようにした。

内容の一例として、資料の一場面を提示し、その時主人公がどんなことを言ったのかを即興的に考えさせる役割演技をさせた。主人公の心情を実際に声に出したり動作をしてみたりすることで実感を伴って考えることができた。

また、このグループエンカウンターの形態をペア、グループ、教師、保護者とバリエーションを加えることで、様々な視点や捉え方を知り、児童生徒は自分の考えを広げることができた。

(6) 教師の支援、評価、見取りの手立て

音楽での実践と同様、全校道徳という位置づけで、主となる指導者T1と副となる指導者T2の役割をはっきりさせ、指導案に位置付けた。

T1指導者は、中心となる発問と指示、板書など全体の進行を行う。T2指導者はペアやグループの話し合いを見取ったり、グループごとのグループエンカウンターファシリテーターになったりする。こうすることで、児童の発言内容や思考を複数の教師の目から様々な角度で評価することができる。

また、ワークシートを用いて自分の考えを書かせることは、児童生徒の思考の過程の記録にもなり、通知表や指導要録への評価の材料として用いることのできる利点もある。

(7) 保護者参加型の授業

参観日で行った全校道徳授業では、すべて保護者参加型の授業の形態を取り入れた。保護者にはカードを書いてもらい児童生徒に渡してもらったり、役割演技のよさを評価してもらったりした。

こうすることで、保護者には道徳の授業の意図を理解してもらったり、児童生徒にとっては教師以外の大人とかわかることで主題を主体的に考えていくことができたりした。

4. おわりに

道徳と音楽の具体的実践を通して、子ども達のよりよい学び合う力の育成について3年間考えてきた。

具体的な成果は、平成30年度の年度末学校評価のアンケートの集計結果に表れていると自負している。

児童への「友達と学び合って学習することが好きだ」というアンケートでは多数がAとBの評価をしている。同様に保護者からも肯定的な評価をもらった。

本校での学び合いを推進するための授業実践の成果を、日本に帰国した後も追求し、新学習指導要領完全実施に向けての教育課程編成の手助けとしたい。